

Title	三田哲学と教育学
Sub Title	
Author	村井, 実 斉藤, 幸一郎 西村, 皓 安藤, 寿康 真壁, 宏幹
Publisher	三田哲學會
Publication year	1991
Jtitle	哲學 No.92 (1991. 4) ,p.23- 53
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設百周年記念論文集II
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000092-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田哲学と教育学

出席者 村 井 実 氏

齋 藤 幸一郎 氏

西 村 皓 氏

司 会 安 藤 寿 康

注・資料作成 真 壁 宏 幹

日 時 平成 2 年 12 月 21 日

安藤 本日は十二月のお忙しい中を、先生方には三田まで駆け付けていただき、本当にありがとうございました。まさに「師走」という感じがいたします。このたびは文学部開設百年の記念ということで、各専攻の名誉教授の先生方を囲んで、三田哲学にちなんだお話をしていただいて、それを「哲学」誌上に発表しようということで、お集まりいただきました。

もともと教育学専攻というのは哲学科にあった専攻で、調べてみまは昭和三十八年に「社会・心理・教育学科」に分かれた。ですからそれまではずっと哲学科にあったわけです。私たちなどは、入ったときから哲学科とは別でしたので、実のところ哲学科にはあまり強い帰属意識をもっていないのですが、村井先生・斉藤先生は十年以上も哲学科の中にいらっしゃいました。そこでまず、哲学科にあったころお話を、ご着任なさったときのご様子などからお伺いしたいと思うのですけど。

村井先生は慶応にいちばん最初にいらっしゃったときの、最初にもたれた授業の思い出とか印象的だったこととかというのがございますでしょうか。

敗戦と「民主主義教育」

斉藤 村井先生は私がまだ幼稚舎の教員をしていた時に、大学の方にお

いになったんですよ、広島から。それは幼稚舎にいても私は聞き及んでおりました。そして村井先生、昭和何年ですか、どうしても昭和二十四年よりも前だと思うのです。村井先生がご着任なさって。

村井 二十三年です。幼稚舎に講演にいったことがありましたね。あれは何年ですか。

斉藤 佐原先生⁽¹⁾が舎長でいらした。村井先生は新進気鋭の新しい先生だということで、ひとつ村井先生にお話を伺おうということになって、そして幼稚舎へおいでいただいて、われわれが村井先生の講演を聞いたんです。その時のテーマまで覚えています、私は。先生覚えてますか。

村井 私は覚えていない。(笑)

斉藤 それは要するに舎長の佐原先生が司会役やっていたから。それで村井先生に「アメリカの民主主義教育の批判」というテーマをね。

村井 「批判」というのがついていた？

斉藤 「批判」というテーマを村井先生に差し上げて、それでお話伺おうと。そしたら村井先生の最初の話だけは覚えているんですけど、「批判というテーマをもらったけども、批判というのは何も悪いところばかりを選ぶことではない」というところから始まりましてね。で、アメリカの民主教育というものについて知っていることを、いろいろお話ししましょうということだったんですよ。覚えております。

村井先生、その後かな、教育使節団の翻訳をお出しになりましたよね。だからたぶんその頃は村井先生は教育使節団の、「日本の教育に関する勧告書」、それを村井先生一番よくお調べになってる真っ最中だったんじゃないかと思うのですけどね。

村井 そんなことなかったね、全然違う。(笑)

斉藤 違いますか。今度は村井先生にいろいろしゃべってもらわなきゃ。(笑)

安藤 その教育使節団の翻訳というのは、講談社から「学術文庫」⁽²⁾で出

ましたね。

村井 ずっと後のことだものね。

安藤 あれはもうその頃から御関心をおもちで、研究なさっていたんですか。

村井 いや、全然関心ないわけ。(笑) だからその時はそういうテーマをもらったけど、戦争に負けたばかりだし、不愉快なだけ。(笑) 民主主義というものも考えたこともない。だから民主主義教育なんてあるものかという話を、確かその時していると思います。

斉藤 何かそうだったと思いますね。

村井 教育は教育なんで、いまさら民主主義教育でなければならないなんてことはない。当時は敗戦直後で、民主主義教育というのが流行って、これからは民主主義でなくちゃいけないということがワアワア言われてたから、そういうテーマをもらったんでしょう。

斉藤 われわれは幼稚舎の教員でしょう。それで新教育、新教育というんで、やれコア・カリキュラムだとか、何だとか、アメリカさんの持ち込んだ、至って変わった、われわれからみれば常識外れな、そういうことをいろいろ知ってきたから、戸惑いしてた。

西村 それはずっと後の村井先生の講義とか、あるいは普通の話のときにも、だいぶ後からでも出てね。いわゆる民主主義というのは政治の概念であって、民主主義的教育などというものはない、民主主義と教育なら話はわかると、そんなことを。

村井 一般的に、教育は民主主義でなければいけないというようなことが、戦争に負けたばかりで、言われた。昨日まで反対のことだった連中がそういうことを言いだした、そういう状態の中だったから余計に民主主義教育などというものはないという話をしたわけです。そうしたら桑原⁽⁸⁾(三郎)さんが、民主主義ということはファンクショナルには言えるんじゃないかという質問をしたりした。後で桑原さんとその話をしたこと

があるけど、ファンクショナルには民主主義教育といえるんじゃないでしょうかと質問が非常に印象に残っていました。とにかくあの時はそういう状態でしたね。もうすっかり忘れてたけど、その時齊藤さんもいたんだね。

齊藤 わたしが教員の仲間でしたんですよ。

齊藤先生の赴任

西村 大分はいついたの？

齊藤 大分は昭和二十四年の四月からです。

西村 そうすると幼稚舎から大分へ行ったわけ。

村井 しかし大分にはほとんどいなくて、直ぐにこっちへ呼び返されたわけね。

齊藤 大分には骨を埋めるつもりで行ったですよ、私は。自分の郷里でも何でもないんですけどね、行く時はそのつもりで行ったんです。大分では二、三カ月たって専任講師でしたけどね。ところが横山先生⁽⁴⁾というのは私の恩師で、その先生から秋になって手紙がきまして、それで慶応の助手になって戻る気があればどうだという手紙がきた。私は直ちに電報を打ちましたよ。(笑)あの頃は電話の時代じゃないんです。電報を打ってそれで戻りたいと、そして昭和二十五年の私は六月に村井先生と結局お仲間に、その時からさしていただいたという形です。

安藤 では大分にはほんの……。

齊藤 一年と二カ月。

村井 大分からこういう人を呼ぶからよろしくという話を、西谷さん⁽⁵⁾から聞いて待ってた状況だったんだけど、どっかで腹痛を起こして来なくなったという話だったんだね。

齊藤 そうなんです。いや来なくなったんじゃないで、(笑)その時盲腸炎、大分の最後で、三月の末ごろ盲腸炎で、一カ月ぐらい。東京へくるだ

けは来たんです，それで寝込んだんです。だから慶應で四月採用にならなかったわけです，六月採用で。寝込んでたから。その辺ではそういうご心配なさってたわけね，来ないんじゃないかなんていう心配，それは知らなかったけども。(笑)

村井 西谷さんが斉藤さんだというのはこういう人だということまで詳しく説明してくれて，それで待ってた状態だった。あの時，どっか汽車の中で腹痛起こしたという印象だったけど。

斉藤 腹痛のまま汽車に乗ってきたんです。それで一カ月寝込んだんです，東京へ来て。

教育学専攻再興

村井 その前の状態がこの年譜ではわからないんだけど，要するに教育学専攻というのは，哲学科の中にあったわけだから，小林さんが一人⁽⁶⁾でやってらしたんじゃないかと思う。ところが小林さんがパー⁽⁷⁾になった。だからその代わりということで，ぼくが急遽呼ばれてきたという形です。で，来てみたら，教育学科というのは一種の崩壊状態にあって，新館さん⁽⁸⁾という社会学の主任教授の預かりということだった。

安藤 預かりというのは……？

村井 社会学主任教授が教育学科を預かっていたのです。新館さんが仮親，仮主任，そして実質的には，学務理事だったカポちゃんが……。

安藤 カポちゃんというのは……？

斉藤 橋本⁽⁹⁾孝という先生。カポちゃんじゃもう通じないんだ。(笑) 橋本孝というね。

村井 倫理学のね。

斉藤 とても恐い先生がいて。

村井 その橋本さんが当時学務理事で，結局はすべてを取り仕切っていたわけですから。だから斉藤さんに来ないかというのも，もちろん横山さんが

直接の恩師だろうけれども、実際には全部橋本さんのところで話が決まった。つまり教育学科の再編成の話が進められて、結局ぼくがいなきゃいけないし、加えて、あの当時は全国の大学に教育学部というものをどんどん作っていく状況のなかだから、新しく教育心理学とか、教育社会学だとかいうのが必要になってきた。慶應では教育学部の新設というふうには動かなかったわけだけれども、とりあえず西谷さんが教育心理学ということで来られた。でも西谷さんがいつ来られたのか、ぼくと同じ年なのか、その前の年だったのか、ちょっとそこら辺よくわからない。それから中山さん⁽¹⁰⁾、山本さん⁽¹¹⁾、山本さんは秘書課の仕事をしていた方が急遽社会学をやる。これ進駐軍との折衝をもっぱら秘書課でやっていて、その当時は教育社会学なんていっても実質上はアメリカとの折衝の問題ばかりだからでしょう。だから教育社会学を山本さん、教育心理学を西谷さん。西谷さんは高等部から来られたという話でした。

斉藤 最初はそうですかね、それで予科の先生をなさってた、予科で心理学を。

村井 中山さんはそれまで幼稚舎の先生だったのかな。

斉藤 その頃は普通部の先生。

村井 だからこうして僕が結局教育学概論とかそういうことをやって、西谷さんが教育心理学、中山さんが日本教育史、それで山本さんが教育社会学ということで、一応の格好をつけてスタートしたのがこの二十三年だろうと思う。そこへ助手がいなきゃいけないということで。

斉藤 助手というのが私です。

村井 それで急遽斉藤さんに来てもらうということになって、そこからスタートしたんだと思います。

安藤 いまは、教育学専攻には「教育哲学」「教育史」「教育行政」「教育心理学」と、大きく四つの柱があるという形で、われわれも新入生には紹介するのですが、この時から……。

村井 そういう形になったのはもうずっと後のこと。

斉藤 その辺からのことですね、結局もとはそこにあるのね。

安藤 それは何かポリシーといいますか、どなたか小林先生か何かのポリシーで、その四本柱というようなことをとくに意識なさっていらっしやったのか、それともたまたまだったのか。

村井 小林さんとは関係がない。

斉藤 小林先生はページで、一遍引っ込んで。

村井 橋本先生が職責上、文部省の委員会に終始出てたから、天下の情勢をよく知ってらっしやった。だから全国あちこちで教育学部ができる動きもわかっていた。そして従来の旧制の場合は哲学科の中に教育学というのが一つあっただけなのに、今度は新しくアメリカ風に教育学部という考え方になって、教育学概論というのはもちろんあるわけだけれども、教育心理学だとか、教育社会学だとか、要するにアメリカ風の教育学にしなければならない、そういう情勢を知っていたから、慶應でもそれに近づけたいと考えたんでしょうね。しかしとりあえず何もないんだから、まずそういうことの専門の先生を三人ですか四人ですか、日本教育史もあわせて、とにかく揃えておこうということだったんじゃないだろうか、と思います

斉藤 西谷先生はアイフェルという、これはアメリカの CIE⁽¹⁹⁾ が主催する、要するに大学の先生の再教育みたいな、アイフェルという講習会というのをやった。日本中から都合のつく若手の先生を集めまして、何カ月がかりでやっていたんです。そのメンバーだったんですね、西谷先生は、アイフェルというのはちょうど西谷先生ぐらいの年の人が、日本中から集まっていたね、あの頃は。

村井 それも橋本さんの指図でしょうね。

斉藤 そうでしょうね。慶應からは山本先生も行ってましたかね。

村井 進駐軍との折衝関係をもっぱら山本さんがやってらしただろうから、きっとそうだろうと思います。

西村 小泉さん⁽¹³⁾の鞆持ちやってたからね。

村井 小泉さんの秘書だったわけだから。

教育学への思い

安藤 西村先生がご着任なさったのは二十八年ですが、その前、学生でいらっしやった頃の村井先生の授業の思い出などを……。

西村 概論は先生だし、それから演習も先生がやっています。そこへ僕が入ったときは、加藤健と二人だった。新入生が二人だけだった。(笑)

村井 君の卒業写真は君と二人だったな。

西村 そうなの、先生と二人だった。(笑) あれは加藤が途中で病気したんで、一年遅れちゃった。だから結局卒業は僕一人で一番で出たんだ。(笑)

安藤 教育学を志望された動機というのは、どういうものだったんでしょうか。

西村 僕はね、これは先生まだ御存じない、つまり僕は二十年の暮れに兵隊から帰ってきて入ったんだから、途中で制度が新しくなって、新制の学部に入ったわけだ。その時に僕は教育というかな、要するに人間を直接に扱って、そして人間のことを勉強したいと。しかしもう一つはっきりと教育へ行きたいと思ったのは、とにかく、あれはだれだったかな、確か山本有三の『米百俵』という劇があるんだ。これはある藩が傾いて、そこへ隣の藩から援助が来たわけ、米百俵、これで今の危機を切り抜けなさいと。その百俵をめぐって城内でもって議論が戦わされたわけ、これを領民にそのまま分けるか、それともこれを金に換えて学校を創るか、要するに将来の人間を創るかということで二つに分かれた。今もう食うに食えないんだから、もうそれは分けるというのと、いやそうじゃないと、ここは歯を食いしばっても頑張って学校を建てて、人材を教育して養成していったほうが将来のためにいいと。結局、究極的にはそれで学校を建てるというこ

とに藩内は落ち着いたという、そういう劇なんだけどね。

日本が負けて、それで僕は帰ってきたわけだろう。もう本当に荒廃を絵に描いたようなもんだから、これはやはり日本というのとはともかくこのまま滅びてしまったらいけないんで、なんとかしてでも建て直していかなきゃいけない。やっぱり建て直すには百年、二百年かかるから、だから今の「米百俵」じゃないけれども、やっぱり人間をつくっていかなきゃいけないというんで、教育という考えがその時はっきりよみがえったわけ、頭の中に。

それで、そのことを僕は予科の時に非常に親しくしていただいた先生で、林さけ⁽¹⁴⁾ちゃん、さけちゃんと言っているんだけど銚蔵さん、予科の時よく遊びに行ったりしてたんだけど。それで来年学部に行くに当って専攻の志望を出せというんだけど、僕はこういうことをやりたいんだと言ったら、教育に村井君という人が若いけど来たと。林先生が言うには、村井さんは何かやる人だと僕は思うと、こう言うんだ。だから君は教育へ行った方がいいというんで、僕は全然村井先生のこと知らないから、林先生の言うことを聞いて、それで教育へ入ってきたわけだよ。

斉藤 そうなのね、林先生のね。

村井 二十三年になるわけ？

斉藤 大学の教育学専攻に入ったわけね。

西村 二十五年でしょう。

村井 そうすると随分後だよな、沼野……。

西村 そうなんです、だから沼野⁽¹⁵⁾さんのことは知らない。(笑)

村井 そうか、間がだいぶあるんだね。記憶っていうのは怪しいもんだね。(笑) とにかく僕が来たときに沼野は三年でいた。卒業論文にアドラーを半分やってるのを、結局僕の授業に出たためにやめちゃって、ソクラテスか何かに変えた。(笑)

西村 先生の演習は全部プラトンだった。だけどそれが今思うと本当に

僕の基本的な学問への一つの力になったね。

齊藤 それは今初めて聞きました。教育というものにそれだけの重い意思をもって選ばれたわけね。

西村 なぜ慶應を選んだかという、また話が元へ戻っちゃうけども、僕は小林澄兄先生というのを知ってたんだよ、なんで知ってたか。それでともかく何か大正、昭和か、昭和の初めの頃から何かいろんな面白い教育やってたと。ぼく全然知らないけど、そういう新しい教育やってた人が慶應にいるというんで、それで僕は慶應に入ってきた。だから小林先生がそのままいるかと思ったら、いま村井先生のお話になったようにページでいなくなった。だから哲学でもやるかと思ってたんだけど、やっぱり教育に対するあれは捨てきれない。それでさっきの話に戻るわけだ。林先生のところへ行ったら、いや村井先生という面白い何かやりそうな人が来たど、君は村井先生について教育やりたまえとあって、その一発で決めちゃったんです。(笑)

齊藤 今の話で私のことも言うと、私は心理学専攻なんです、出身がねだから初めは心理学やってたわけです、実験心理学。ところが幼稚舎の教員になってみると、手元には子供たちがたくさんいて、それで心理学的ないろんなデザイン組んで実験をやるとかいうことをするのは、たいへん打ってつけの、そういっちゃ悪いけれども研究材料がいくらでもいるわけ。それでいろんなテーマもらったりしてやってたわけです。たとえばローマ字の教え方をどういう教え方をすればいいか、仮説二つぐらい立てて、実験的にローマ字の教え方を変えてみたりして、その結果を比較するというようなことをやっているうちに、結局心理学から教育心理学の方に自然に変化したわけで、それもやっぱり幼稚舎の教員のおかげですね。その結果として結局大分行くときも、教育心理学ということで行くという形になったものですから、それ以後ずっと教育心理学になったという経緯です。ですから、西村さんみたいに遠大な望みをかけたとか、そういうことじゃな

いんです。

西村 遠大じゃないんです。

斉藤 幼稚舎の教育から出発した。

安藤 でも、ご自身の経験が出発点だったわけですね。

西村 だから縁というものはあるもんだねいろいろと。もし先生が来てなかったら、僕は今日はないだろうね。他に哲学へ行って、何かわけのわからんことをやってたかもわからないし。第一学校へ残ることになったのも先生のあとおしがあったからだ。僕は家が傾いちゃったから、斜陽族というか、だから僕は勤めるといったんだ、学部出て。そしたらお前そんなのはどうにでもなるんだと、奨学制度もあるし。で、先生にそういわれて、やっぱりやりたいからそれで大学院へ行った。

斉藤 あの頃は教育学には大学院がなかったでしょう。だから仕方ないから哲学の方の大学院に、西村さん、行ったわけでしょう。

西村 文学研究科の哲学の方へ行ったわけだよ。

斉藤 教育学に大学院ができたのは、出遅れた形ね。よその専攻と比べて遅れているんですよ。

西村 それで二年終わったところでもうこれ以上とても家計のことを考えるとね。そうしたら先生がいろいろ心配してくれて、助手に推薦してくれたんだよ。そういう今までの、つまり僕は新制の大学、そして新制の大学院の初めての卒業だから、そういう例が無いわけだ。だからだいぶ先生は苦勞されたろうと思うけど、僕を助手にすることについては、先生はまだその頃助教授で、教授会へ出られないわけだよ。

村井 それも厚かましい。若気のいたりだね。カポネ（橋本先生）に直談判して、随分いじめられて皮肉られたけど。（笑）

西村 だろうと思うんだ。僕は教授になって教授会なんて言うものを知るようになってから、あの時先生は御苦勞されたろうなと。

安藤 以前「ロマン主義教育学再興」（以文社）の出版記念のとき、先生

のスピーチでほんの少しその辺の経緯を伺ったことがありますが、そういうことがあったんですね。

西村 そうだったかなあ。それで先生が助手にしてくれたという、それでやっと一息ついて。だけど先生にもうひとつ感謝しなければならんのは、助手というのは講義を持たないで専ら研究すべきだという、その考え方を押し通してくれたから、僕は確か授業を持ったのは助手の後の方で、専任講師になってからだと思う。

斉藤 昭和三十五年以後だから、その前は書いてないからわからない。

西村 そんな遅くはないんだけど、ずっと勉強させてもらったのがこれがよかったね。

斉藤 それはよかったですね。

西村 だから助手というのはいまは気の毒だよ、いろんな仕事があって。(笑)

斉藤 私の場合は逆で、一度大分で専任講師でしょう、それからこっちへ助手で戻ってきたでしょう、もう雑用いっぱいあった。教職課程が始まった頃で、教職課程の、いま松本憲⁽¹⁶⁾さんが中心になってやってるけど。

西村 いや、ぼくがやらなきゃならなかったんじゃないかとか。(笑)

斉藤 教職課程に関しては、実際に西谷先生と私が一生懸命やらざるをえなくて。

村井 やりそうな顔してるから。(笑)

斉藤 そう、やりそうな顔してたもの。それで助手になって戻ってきて、一年か二年たつうちには、今度は入試の方の本部員か何かに飛び込んだりして、もう横の方から文学部中引掻き回したような動き方を僕はしました。だから西谷さんとはちょうど正反対、だから勉強する時間もないくらいにすごく忙しかったですよ。(笑) 今になると何でも言えるもんですね。

知られざる論文

村井 しかしこれをみると、西谷さんが三十年？

安藤 1930年です、昭和五年です。

村井 だから西谷さんは、若い頃は「ペスタロッチの社会哲学思想と社会教育思想」と、こんなのやってるわけね。

安藤 これはちょっと調べてみて本当にびっくり、面白いですね。

斉藤 本当ね。西谷先生こういうことやるからね、これはこれは、昭和五年にね。

村井 あの頃は小林さんが一人でやってたわけだから、西谷さん、小林さんのところで勉強したのかねえ。

斉藤 そうでしょうねえ。

村井 小林さんが「ペスタロッチの教育原理」を書いているでしょう「三田哲」に。そして西谷さんが、それから二年たって「ペスタロッチの社会哲学思想と社会教育思想」を書いているでしょう。西谷さん、小林さんにずっとついてやってきたんだね、きっと。

斉藤 恐らくそうでしょうね。

村井 その頃は、だから、小林さんしかいなかったということでしょう、教育学はね、だからそういうことになってるわけだ。それでこの二十三年の時点で、教育学科はとにかく寄せ集めで再出発したんだと思うよ。

安藤 小林先生がお戻りになったのはいつごろになるんでしょう、ページで引っ掛かってから戻ってらっしゃったのは。

村井 だいぶ後だな、ページが解けたのは。一般的に日本中解けたわけだから。何年だったかね、それもクロノロジーとしては、ちゃんとわかっているわけです。それでとにかく小林さん帰ってこられたのだけれど、小林さんのやるものがないわけです。それで小林さんに何かやってもらわなきゃいけないというので、教育学概論をやっていただきましょうというこ

とにした。⁽¹⁷⁾

齊藤 村井先生がやってたんですけど、小林先生にやってもらうことに。

安藤 そうなんですか。「履習案内」をみますと、昭和四十六年ですから、つい最近まで小林先生が概論を持っていたらしゃった。村井先生が概論で登場するのは四十七年からなので、そこで初めて概論をなさったのかと思ったんですけど、そうじゃないんですね。

村井 そうじゃなくて、僕が来たときからすでにやっていたんだけど、小林さんが戻られたから、小林さんにやっていただくことになる。だから、小林さんがいられる間は、小林さんがやってるということですね。辞められてから、また僕がやりだしたわけかな。

齊藤 小林先生は頑張っていたんですよ、ご老体なのに昭和四十六年までですか。頑張っておられてね。

安藤 「哲学」に掲載された論文のタイトルをみてゆきますと、西谷先生がペスタロッチをなさったというのも面白いのですが、先ほど民主主義の話がでてまいりましたが、齊藤先生が「民主主義の理解」という論文をお書きになっているんですね。これは昭和二十八年になりますか、横山先生などといっしょに。ちょっと読ませていただいたんですけど、非常に面白い実証的な研究ですね。

齊藤 これはどうしてこういうテーマのでやったかという、結局心理学の方に私が卒論指導その他で協力する、という形を取ってたんです、この頃。心理学の助手じゃないですけどね。それで卒論の学生がいて、その学生の指導を僕が横山先生に頼まれてやることになりまして、時代はアメリカさんのおかげの民主主義なんだから。民主主義というものを日本の子供たちなりがどのくらいまで今や理解しているか、というようなことでアンケート調査みたいなものを行ったんです。

安藤 かなり膨大なアンケート調査ですね。二千人近い子供たちに。

齊藤 そう、アンケート調査ということで、むしろある学生の卒論に協

力したという形ですね。

安藤 それから村井先生が「ルソウの自然概念について」というのをお書きになっているのも、非常に興味深かったんです。いわゆる先生のご専門と申しますか、プラトシの話がでてくるのはもうちょっと後の1958年、昭和三十三年です。このころルソウを先生が取り上げられたのは、どういふ考え方の流れがあったのか、興味深いのですが。

村井 あまり理由はないんじゃないかな。自然というのは大切な概念だから、たまたまルソウを取り上げただけだと思いますよ。

斉藤 私は教育学の助手になってからも、随分心理学研究室に片足つまこんでやってたわけです。心理学実験室の方も人出が足りないものだから、そうだったんですね。そういう形でも忙しかったんですけども、そういう形を随分取っていました。

社会・心理・教育学科時代

安藤 昭和三十八年に、哲学科から社会、心理、教育学が分かれて独立した学科になったわけですが、その時の経緯や雰囲気の変化などについてお聞かせいただきたいと思います。

西村 それは村井先生がいちばん知ってるんじゃないか、その頃のことば。

村井 社会、心理、そうだね、あれは教育学とは関係なかった。まそで地震があって(笑)、その影響で結局そうなったというようなことだったと思う。つまり主として社会学だったと思うんだけど、哲学から離れたいという何かのことがあったんだね。しかし一人だけ離れるわけには行かない、だからだれか誘わなきゃならない、それで結局、心理学の横山さんと社会学の佐原さんとで哲学から離れることになったらしいね。それで教育も一緒に来てくれないかという話になった。教育学では将来すぐにも大学院の問題もあったけれど、哲学科のままでは大学院を作りにくいし、哲学

から離れて新しく動けば、結局新設ということで、大学院も作りやすくだろうし、というようなことで誘われて、要するに哲学から離れたという形だと思う。

斉藤 その頃私はまだ助教授でしたから、教授会のメンバーじゃないので、その辺の細かいことは村井先生に聞くよりしょうがないんですけども。

西村 その辺は僕の方が覚えているね。それは先生が教室の連中を呼んで、そして実はこれこれこうこうで教育どうするかということを決めてくれということと言われてきたというんで、先生がそのとき話したんだけどね、二つあるんだよ。一つは哲学に入っていると学生が卒業の時に、「文学部哲学科」とそこまになっちゃって、その下の専攻を書くところがないんだよ。そうすると社会学出て文学部哲学科になっちゃう。これは就職に大変影響があるんだって。(笑) その考えが良い悪いは別だよ、ともかく客観的にそういうことがあるということが一つ。と、それからこれは取って付けたのかどうか知らないけど、社会学も最近科学になってきたと、だから古い考えをもった哲学のなかへ社会学が入っているのは馴染まない、と。だからこれからは新しい社会科学としての社会学になっていかないといけないと、それについては教育だって心理だってそうでしょう、というようなことを言って来てっていう。

村井 まあそうね。

斉藤 裏話みたいな話は知ってるんです。佐原先生がおっしゃったんですけど、教授会で名前をどうするかということになったんです。たぶん社会学専攻は社会学科にしたかったらしいんだな、想像するに。一生懸命それを頑張ったらしいんだけど、結局横山松三郎先生が頑として聞かなかった。で、社会、心理、教育学と並べて、社会・心理・教育学科という名前じゃなきゃ承知しないという裏話があったみたい。

村井 僕は佐原さんから、「行動科学科」という名前でどうだろうかと

いう相談を受けた。それは、その当時ハーバードで、行動科学、ビヘイビオラル・サイエンスという学科ができた影響もあったんでしょね。行動科学科ということでどうだろうかという話が、かなり真面目にあった。それで僕は、行動科学科というのはちょっと、というんで、承知するのを躊躇していた。

斉藤 そうしなくてよかったですね。

村井 そうしたら佐原さんが、行動科学といっても、そう狭い意味じゃないんですけどねえと呟いて嘆いていたのを(笑)、思い出します。しかし結局行動科学科はどうも納得できませんということで、そのときは佐原さん諦めたわけです。

斉藤 佐原先生が私に個人的にいったことは覚えてるんです。横山先生やたらに頑張るものだから、これ以上反対したんじゃ先生が倒れるといけないと思ってね、負けたんだというんですよ。そう言っていましたよ。(笑)

西村 心理が消えちゃうからな。

村井 後でハーバードで聞いたのだけど、ハーバードでも名前を決めるのに困っちゃって、もうどうでもいいや、教授会解散するときに、誰かがひょいとビヘイビオラル・サイエンスといって、それが決まっちゃった。(笑)

西村 そんなもんだね。

村井 そんなもんだよ、名前なんて。

安藤 最初この学科に入ったときは、ただ専攻名が羅列してあるだけで、何か上位概念というようなものはないのかなと思ったものです。しかし現在、「人間関係学科」という、これも意味のよくわからないレッテルがついて、一つの名前にまとめるのはなかなか難しいものだという気がします。まあ名前なんて、それほど重要ではないのかも知れませんが。

斉藤 よく考えてみれば「文学部」だっておかしなわけで、みんなが文

学やってるわけじゃないんですね。でももうそれで通っちゃってるから、全然不思議がらないんですね。

安藤 では昭和三十八年の段階で分かれたときに、学部単位の教育内容とかは、実質的には変わりなかったということですね。

斉藤 そうですね。実質的には何も変わらなかった。

安藤 西村先生がディルタイに関心を持たれたのは、村井先生のゼミのプラトンの影響から、どういうふうに移っていかれたのでしょうか。

西村 それは大学院にいったときについた僕の先生が務台理作先生⁽¹⁸⁾で、西田哲学の例のあの先生なんだけど、この人が、「西村くん、助手に残ってからどうするのかい、何やるかね、ナトルプでもやってみたらどうかな」と。ナトルプって僕は渋ってたんだ。そしたらディルタイやってみないかと、それで何の気なしにディルタイはじめたわけ。で、村井先生にディルタイやってみたいといったら、先生はこの通りの人だから、そうかおまえがやりたいならそれやれということで、ディルタイへずっと。

それにはしかしもう一つの話があるんだ。二年ぐらいたってから、僕はディルタイのことはもう大体わかったと、だからディルタイか先へ行きたい、シュプランガーか何かやりたいといったら、慶應の前にルミエールという喫茶店があったの斉藤さん覚えているかな、ルミエールというのがあったの。そこで、おまえディルタイから先へ行きたいというけど、ディルタイの考えが二年やそこらでわかるはずがないというんだ。もっと勉強しなきゃだめだと。それからそう言われてまたディルタイへ帰っていったら、今度は止まらなくなっちゃった。それからずっとやって、十年目に先生がやっとな、おまえ十年もディルタイやったんなら、少しまとめてみないかというんで、先生の推薦で、先生がそのころ計画していた『世界思想全集』というのがあって、牧書店に先生関係してたから、そこへ「ディルタイ」というのをに入れてくれて、それで「ディルタイ」というのができた。大体ディルタイがああいう『全集』の中に入ってるのなんか、ほとんどな

いんだ日本には、およそ『全集』と称するもののなかに「ディルタイ」が単行本として入っているのは世界でも珍しいんじゃないかな。先生があれを取ってくれたというのは、だから非常にありがたかったね。まだディルタイ研究は続いているけど、どうもしょうがない、これは、だけどそういうことがあってね、先生の一言でまたもとへ戻って。(笑)

村井 わかったからやめたいなんて言うのは、まったく生意気ですよ。(笑)

西村 まったくピシッとやられたよ。

女は一流？——学生事情の変遷——

安藤 昭和三十年代ぐらいの学生というのは、今の学生と比べてどのような違いがあったんでしょうか。学問的な関心とかゼミなんかを振り返って、なにか興味深い逸話があったらお聞かせいただきたいのですが。

村井 最初の頃は戦争からいきなり戻ってきたりというふうなことで、まさに玉石混淆だったね。歳もまちまちだし。その後しばらくの間というのがどうも石ばかりだったかな。玉は女だけだったりして、男は駄目、今でもそうだけど。女は一流。

斉藤 落ち着いてくるに従って、女子学生がのしてきましたね、何となく。

村井 だから一時ふつうに試験すれば必ず女が多くなるから、女の数を制限しようという話が教授会で出たことがある。だけど、それはおかしいよと、結局やらなかったけど、やはりそういう話が出るほどだったね。

斉藤 女性がのしてきた。

村井 しかし最近男子もレベルが上がっているんじゃないですか、昔と比べればね。とにかく一時は、いろんなのがいて面白かったとは言えるけど(笑)、それはイメージ的な意味で、本当に面白い学生がいたということはない時期がかなり続いたような気がするね。

西村 それで思い出すのは、昔は演習というのは教育学演習しかなかったんだよ。それは必修で、これは教育心理学をやる人でも教育史をやる人でも、教育学演習は必修。それからあともう一つとらなきゃいけない、それは選択で教育心理学演習を取るか、教育史演習を取るか。だから学生は二つの演習を取ったわけね。教育学演習はずっと村井先生やってたんだけど、僕が講師ぐらいになってからかな、何かおまえ三年生持ってくれというんで、その頃二十五、六人だったけど、教育学の学生は、それをだから先生が四年生を持って、僕が三年を持つという、そういう形になったわけだよ。

で、ぼくはある時教室へいったら、男子学生は三人ぐらいしかいないんだけど、それが外の廊下にいるんだよ。もう時間なのに廊下にいてぼそっとしているから、お前どうしたんだと、中へ入れよといったら、いや先生とてもじゃないけど中へ入れませんと言うんだよ。なんでだって言ったら、中で女の子がキャアキャアやってるわけだ、その中に入っていけないんだ。(笑) だらしが無いんだ、全くもう、女の子に押されちゃって。だからおれが来るまで待ってたのかといったら、そうだと。先生と一緒に入っていきたい、そんな調子だからね。

村井 一般にマ스プロ化していったわけだね、急速に一年一年と。だから最初は学生は何人かしかいなかったんだけど、それが、今のお話のように、演習も手分けしてやらなきゃいけないように数が増えていったでしょう。そのマ스プロ化していくプロセスで、自然にまかせておけば、女がどうしても優勢になった。

斉藤 結局その後演習二本立てというのは止めたのね、人数がやたらに多いから。やっぱり先生の数で分けた方がいいということで、演習は一本立てになった。

西村 だって卒論をみなきゃならん、それは心理とか教育史のように選択だと学生が分散されるけれども、教育学演習は必修だから全部きちゃう

わけだ。その卒論見るって、そう簡単にはいかない。それで先生にいつか申し上げて、ともかくこれだけスタッフも揃ってきたよね。

斉藤 それで教育学がみんなで話し合ったらうえ、やっぱり変えようと。

西村 だからその代わり教育学演習にして、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲでナンバーにして。

斉藤 名前は全部教育学演習でね、内容は教育心理であってもいいしということ。

西村 そういうふうにした。

安藤 「案内」を見てますと、村井先生の教育学演習が、「教材は未定」というふうにかかれていることが多かったのですけれども、昔から学生と相談して決めるというような主義でいらっしゃったんですか。

村井 それはそういうことでしょう、多分。

斉藤 そうよね、演習者の授業に教材というものがきちっとしなければならぬわけじゃないし、演習というのは本来、いろんな教材が入れ替わり立ち替りしたってちょっと構わないんで、はじめから決めておかないほうがいい場合だってあるわけですね。その後卒業論文も文学部全体がそういうふうに取り決めて、義務付けられましたね、卒業論文必修じゃなくなった、今もそうでしょう、卒業必修じゃないでしょう。

西村 いや、なった、元へ戻ったんです。

斉藤 そうですか、ひと頃必修じゃなかった。

西村 ひと頃そういうことがあったんだけど、それはやっぱり卒論が責任もってみれないということだろうと思うんだけどね。だけどもう一度帰ったというのは、やっぱり文学部というのは卒論を書かないと、四年間の締め括りができないんじゃないかと思う。やっぱりそこへ戻ってきたわけね。

村井 そうだね、だからマスプロ化というのはすごい。いつのまにかこっちの方が押されに押されて、結局もうやりっぱなしになってきてるわけ

です。教育学演習など初めはどうしてもわからしておかなきゃいけないと
かっていうんで、必修とかってやってたのが、結局そんなこといっておれ
なくなった。結局最後には、卒業論文もそうだった。

齊藤 昭和三十年に入って直ぐぐらいの時ですかね、いま上野毛幼稚園
にいる伊東幸三⁽¹⁹⁾君、あの年代だけが二人だった、浜西とあれと二人、それ
以後増えたんです。というわけかあすこだけ二人になっちゃったのね、変
な現象なんですけど。それは非常に貴重な二人だったんです。

村井 男がでしょう、女はいたんじゃないの。

齊藤 いや、二人。

村井 女もいなかったの。

齊藤 浜西と伊東幸三と二人だけしかいなかった。

村井 ああそうかねえ。しかしとにかく入学試験も文学部全部で何百人
しか採らなかった時代がある。だからその頃は試験はもちろん面接なんか
も一人一人にしてたわけだ。教授が何人がかりかで一人一人を面接してた。
また、成績がちょっと悪いと、すぐ父兄を呼び出したりしてた。清水（潤
三・考古学）なんかはそれが熱心だった。丹念なことやってたもんだね。
だけどそんなものもいつのまにかなくなっちゃって、もう今は面接なんて
考えられないでしょう。本当にどんどん手抜きがひどくなっていったね、
時の流れでしょう。

安藤 確かに手抜きになってきたのかも知れませんが、逆に大学院の入
試は昔は何かすごく大らかで、先生が本を一冊持ってきて「おう、ここか
らここまで訳してみろ」とか言って、それで決まったとか。そういう意味
では昔の方が手を、どっちが手を抜くかわかりませんが、一応形式的に
はだんだんしっかりしてきたような……。

村井 逆ですね。昔は手を抜くんじゃなくて、結局一人一人が親しかっ
た。だからよく知っているから、それでよかったんです。だが、だんだん
知らなくなってくると、どうしても機械的にやることになる。今は大学院

の試験は、名前もわからなくしてるんじゃないの。

安藤 そうです、全部名前を伏せてやっています。

斉藤 よその大学から受けることも多くなってきたし、そういうことでやっぱり少しシステム化したわけですね。

安藤 昔は内部からの出身者がほとんどだったんですか。

斉藤 外からなかなか来なかったですね。

安藤 今は四年生が二十人、三年生が三十人、二年生が四十人と、少し増えつつあります。

村井 そんなにいるんですか。

安藤 はい、私が入った頃はもっと多くて、六十人とか八十人とかいたように思います。

斉藤先生のゼミなどは六十人近くいたのではないかと記憶していますが。

斉藤 僕のゼミの時に、三、四年合わせてのゼミという演習が、六十人超えたときがあるんです。ゼミの体をなさない。

西村 ゼミにならんでしょう。

斉藤 あの頃の学生は本当にゼミは経験はしてないみたいなんですね。

村井 だから本当なら先生の数が増えてなきゃいけないわけだね。

斉藤 そうなんです。学生が増えただけ増えてなきゃいけない。

村井 先生を増やさないで、実際は減らす方向で来てるでしょう。助手がほしいといったって、採らしてくれないというようなことがずっと続いたからね。昔、西村君の学生の頃なんて、一人の生徒に五人の教授がいて、寄ってたかってかわいがるというような。(笑)

西村 たいへんだよ、先生の数の方が多いんだから、贅沢なもんだ。

村井 もちろん経済学部あたりからは、俺たちが儲けてやってるのに文学部は何だって言われて、ずいぶん小さくなってた。文学部長の西脇さん⁽²⁰⁾なんて、経済学部長に頭があがらなかった、可哀相なように。

斉藤 赤字の学部だから。

「三田哲学」と教育学

齊藤 「三田哲学」しか学内の研究雑誌といえなかった時代がずっとあって、その後、社心教が分かれたりして、それで結局社会学研究科の方の「紀要」ができたでしょう、大学院ができたからかな。「社会学研究科紀要」というのができたですし、私個人でいえば学生相談室ができたために「学生相談室紀要」というのも出発したりして、それは昭和三十年代の終わり頃なんですね。そういうものが出発したりして、結局「哲学」という雑誌は私から遠くなっちゃったんです、私個人で言えばね。「社会学研究科紀要」とか、それから「学生相談室紀要」とか、そっちの方が忙しくて、

だけど今にして思うと「哲学」という雑誌一本であった時代の方が、やっぱりいい時代でもあったという感じがします。つまり哲学と結びついていられるでしょう、すべての学問が。だから「三田哲学」にその号でいろんな人が書いているのがとても読み度があるし、われわれ教員はみんな読めるんだけど、その仲間に入って書く気になる。原稿の種類がどうしても「三田哲学」という雑誌にふさわしい原稿を書きたいというようなことは、とてもいいことだったと思いますね。

今僕は水戸の常盤大学にいて、人間科学部というところなんですけど、人間科学部というのはとても魅力がある。その気持ちと哲学科の中に教育学もあったという時代と、何か重なってくるんですね。人間科学部の中でいろんな専門が一緒くたになって、それでむこうにも「紀要」があって、一緒くたになって書くと、それでお互いに専門違いが話し合うというようなチャンスに恵まれるというようなことで、哲学の存在理由が今改めてよく自身としては見なおしてるという感じがしますね。

安藤 私は二年生への専攻説明会などで、教育学専攻というのはそれ自体が一つのユニバーシティみたいに、いろいろにアプローチをとることができる場所だといった説明をします。それはやはり、教育においては、

人間を一つの面から見たんでは見えてこない、多面的な見方が必要な学問なのだからだと考えるからです。今のお話を聞きますと、村井先生が赴任なさったころからそういう学科としてのシステムを取り、決して教員養成のための技術的なことを教えるというのではなくて、教育の根本に立ち戻ってアカデミックに考えていこうという姿勢がずっとあったのだということとを改めて認識できたような気がします。

齊藤 教育学というのは、さっき四本柱とか言うけれども、だから人間科学そのものなんだな教育学は。だから教育学専攻は四本柱などといわれるようないろんな専門の人がいて、お互いに交流して過ごしてきたということは、僕にとってもとても良かったという感じがしますね。

西村 三田哲学会に関して言えば、この中で先生が何年だったか、哲学学会の会長をやられた。やっぱり先生のコメントがほしいね、会長を務めたのは一人だったから。

村井 今の西村君、齊藤さん、お二人の話のように、やはり三田哲というのは、もともとが教育も心理も社会もみんな、大きな意味での哲学ということで、ずっとやってきたわけでしょう。それが戦後の情勢の中で、社会・心理・教育というものが外れていったわけだけれども、やはり慶應では全体としての哲学というものの伝統を持って、とりわけ教育学の場合、他の大学は全部教育学部というものになってるのに、慶應ではそれはしないというつもりできたわけです。しないということ、つまり、いたずらに店を広げて、百貨店みたいなものにするのではなくて、大きな意味で教育とは何かということをも基本的なことを考える、要するにフィロソフィーで統一された、学問研究のシステムを保っていきたいという気持ちがあったということです。教育学部というものもあえて学部にもまで広げないで、基本的に哲学的教育学と、全体としてそういう形を取っていくということだったわけです。

それがなりゆき上哲学と離れて、社・心・教とかになった。それだけで

なくある意味で非常にまずいことには、哲学科までが、本来は一つの大きなキャパシティを、あらゆる学問の全部をカバーするだけのキャパシティをもっていなさげないんだけど、どうせ社会や心理や教育なんかを外れちゃったんだから、哲学としてはこれでいこうというふうに、自分自身をまた狭く限定するようになってくる、そういった傾向が実際に起こっているような気がする。

しかしそういったことを、やはり慶應の場合にはなくしたい。三田哲学の伝統というようなものがずうっと保たれていって、哲学や倫理なんかはもちろんのことだけれども、そういった特徴がずっと保たれていけばいいなと考えた。そういうふうになんとかならないもんかと、僕は自分が三田哲の会長をしていたときは専らそう思った。だけれども、これはちょっとの期間のことだし、現実には僕がそう思ったからといたって、そういうふうにするというものでもない。現実にはみんな専攻の科が分かれていて常に動いているわけだ。しかしやはり気持ちとしては、少なくとも「三田哲学」という雑誌には、そういった大きなキャパシティの哲学への夢が何か反映されて出てくればいいなということは、しきりに願っていましたね。

安藤 今日はおかげさまで教育学専攻の歩みについていろいろなお話を伺うことができました。私たちにとってはどれも初めて聞くことばかりでした。たぶん学生たちもこれを読んで、教育学専攻というのはいかような専攻だったのかということ、改めて感じたり考えたりするいい材料になるのではないかと思います。本当に今日はお忙しいところをありがとうございました。

〔註〕

- (1) 佐藤六郎 大正11年4月～昭和43年3月在職。社会学。
- (2) 村井実訳・解説『アメリカ教育使節団報告書』(講談社学術文庫)、昭和54年。
- (3) 桑原三部 昭和23年4月～平成2年3月まで幼稚舎に在職。現在は白百合

女子大学教授。

- (4) 横山松三郎 大正11年4月～昭和41年3月在職。心理学。
- (5) 西谷謙堂 昭和6年9月～昭和44年3月在職。教育心理学。
- (6) 小林澄兄 明治43年4月～昭和21年12月在職。教育学。昭和37年4月から講師として昭和46年7月亡くなるまで、講義をもたれた。
- (7) いわゆる「教職追放(別名 White purge)」。GHQ は昭和20年10月以降、教育に関する四大指令を発し、戦前、軍国主義的教育に積極的に関与した者の教職追放を指示した。日本政府はこれに基づき昭和21年5月「教職追放令」を公布。各種審査機関による審査、GHQ による直接指示により約5000名の者が追放されることになった。1950年前後の占領政策の変化とともに今度は red purge が行なわれたが、上記追放者は、昭和27年4月講和条約の発効を機にその追放が解かれることになった。
- (8) 新館正国 大正12年5月～昭和30年10月在職。社会学。
- (9) 橋本孝 大正4年～昭和44年在職。倫理学。
- (10) 中山一義 昭和15年～昭和49年3月在職。教育史。
- (11) 山本敏夫 昭和24年12月～昭和47年3月在職。教育行政学、教育社会学。
- (12) CI & E (Civil Information and Education Section) 民間情報局。被占領期において対日占領教育政策の立案と実施を担当し教育改革を遂行した。GHQ の一部局。(前記の四大指令にも大きく関与した)
- (13) 小泉信三 明治43年4月～昭和22年1月在職。昭和8年～昭和22年まで。塾長を務める。
- (14) 林銈蔵 心理学。
- (15) 沼野一男 元玉川大学教授。現在神田外語大学教授。
- (16) 松本憲 昭和47年～ 教職センター。
- (17) (7)を参照。
- (18) 務台理作 昭和25年～昭和36年3月在職。哲学。
- (19) 伊東幸三 1963年教育学修士課程卒業。上野毛幼稚園副園長。
- (20) 西脇順三郎 大正9年4月～昭和37年3月在職。

※ 在職期間は、専任として職にあった期間に限定した。

資料

『哲学』に掲載された論文一覧

(西暦) 年	集	著者	表題
28	2	小林 澄兄	ペスタロッチの教育原理
30	6	西谷 謙堂	ペスタロッチの社会哲学思想と社会教育思想
34	12	中山 一義	「学制」頒布前後事情
		西谷 謙堂	児童に於ける色と形の知覚
36	15	西谷 謙堂	重量対比の実験的研究
39	20	小林 澄兄	技術と技術教育
40	21・22	中山 一義	明治維新の教育政策の性格 —近代日本教育史考察
		小林 澄兄	国民学校の理念
41	23	西谷 謙堂	学童の虚像
44	25・26	西谷 謙堂	青年学生の精神的構造—青年学生の宗教
		中山 一義	信の現成—道元の学道論
51	27	村井 実	ルソーの自然概念について
53	29	斉藤幸一郎	民主主義の理解 (横山・小川と共著) —中学校・高等学校生徒の場合
54	30	村井 実	教育作用の美的理解について (上)
55	31	村井 実	教育作用の美的理解について (下)
58	34	西谷 謙堂	教育的行動に於ける児童心理学の意味 —所謂「反抗」の現象分析を媒介として

(西曆) 年	集	著者	表題
		中山 一義	福沢諭吉のみた父百助
		村井 実	プラトンの国家と教育
		西村 皓	教育理念の弁証法
		齊藤幸一郎	「認知された確率」の動揺度
35		小林 澄兄	道德教育について
		中山 一義	慶應義塾起源考
		村井 実	ソクラテスとプラトン —教育史の立場から両者を区別する —の試み
		西村 皓	普遍妥当的教育学の可能性について —ディルタイの所説を中心として
		齊藤幸一郎	「現実・期待」水準差の発達的变化—青 年期心理の一特徴の量的把握の試み
		山本 敏夫	勤務評定に関する研究—教育長協議会 議案についての法制面からの検討
59	37	小林 澄兄	—今日のための「エミール」
		山本 敏夫	公立学校事務職員に関する研究—主と 副の対立を軸として法制的研究
		齊藤幸一郎	—一般化判断の一研究
61	39	井上 坦	—感覚および知性作用の共通源泉
	40	西村 皓	—体験の思想と生の教育学 (上)
		井上 坦	—均衡の概念と教育の基礎論
	41	中山 一義	—花と幽玄と器と
		西村 皓	—体験の思想と生の教育学 (上)
62	42	中山 一義	—年来稽古一世阿弥の稽古思想

(西暦) 年	集	著者	表題
63	43	中山 一義	命には終りあり、能に果てあるべから ず—世阿弥の生涯稽古思想
	44	中山 一義	花の公案
	45	中山 一義	花の公案 (二) —世阿弥の稽古思想
		井上 坦	Rousseau の “nature” と “verlu” が 意味するもの
65	46	井上 坦	J.-J. Rousseau の宗教—及びそれと 教育との関係—
		村井 実	道德は教えられるか
		中山 一義	学貧之説—「正法眼蔵随聞記」を読む—
		西村 皓	「ゲーテと教育学との関係およびゲー テに対するわれわれの視角につい て」
		山本 敏夫	イギリスの道德教育
	47	小林 澄兄	「交わり」の問題を中心として
		西村 皓	ゲーテにおける人間的自然の概念とそ の根本直感について
66	48	井上 坦	社会的平等の根拠について
		西村 皓	ゲーテ教育論の人間学的基礎づけへの 一つの試み
	49	西村 皓	ドイツ・ロマン主義教育学研究への一試 論—とくにエルンスト・モリツ・ア ルトの陶冶概念について—
67	50	井上 坦	現代教育における職業意識の Role

(西曆) 年	集	著 者	表 題
		中山 一義	花伝或問一世阿弥の芸能稽古論に関する三つの質疑
		西村 皓	自然主義的人間観と教育思想
70	56	井上 坦	J.-J. ルソーの無名時代の著作研究
71	57	中山 一義	秘伝書哀史一將軍たちと世阿弥との間
	58	井上 坦	続: J.-J. ルソーの無名時代の著作研究一リヨン時代を中心として
72	60	中山 一義	花と稽古の論理
		西村 皓	ヘーゲルの愛の思想について
74	62	中山 一義	慶應義塾一貫教育制度の成立一福沢の正と死とをめぐって
80	71	井上 坦	教育の根本問題としての制度化一人間生成の抑圧と解放
86	83	井上 坦	「学ぶ」と「教える」関係の新考察の試み一公益概念との絡み合いを軸として